慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	日本人について思うこと：留学生を教えて
Sub Title	What I think about the Japanese people : in a class for foreign students
Author	浅井, 静雄(Asai, Shizuo)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	2014
Jtitle	教養論叢 (Kyoyo-ronso). No.135 (2014. 3) ,p.127- 161
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	エッセイ
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00062752-00000135-0127

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

エッセイ

日本人について思うこと
――留学生を教えて――

浅　井　静　雄

昨年初めて国際センターの日本語の授業を担当した。対象はもちろん留学生である。その大部分は韓国からの学生であったが，普段日本人相手の英語の授業では味わえない楽しさを経験した。

教科書には『声に出して読みたい日本語』で有名な齋藤孝著の『理想の国語教科書』を使ったのだが，テキストを読みながら，関連する話題として，日本の風俗習慣や日本人の物の考え方などに及んでいく。すると学生からいろいろな質問が出てきて，それに答えながら，話題は思いもかけぬ方向に進んでいくこともある。

例をあげると，昨年（この原稿を書いている時点では昨年だが，この原稿が人目に触れる時点では一昨年ということになる），歌舞伎界の名優十八代中村勘三郎が亡くなられた。その死去に際して，息子の勘九郎・七之助兄弟は，京都での興行のために父の死に目に会うことができなかった。このことをどう思うか，という質問をしてみた。

クラスの韓国人学生の多くはクリスチャンであったが，韓国もまた儒教文化の影響下にあることは否定できない。当然中国人も含め彼らの答は，自分たちの国ではそんなことは考えられない，というものだった。

また日本のプロ野球球団に所属していたアメリカ人選手が，妻の病気だったか，出産だったか，とにかく妻のために試合を放り出してアメリカに帰ってしまった例をあげ，これが世界の常識であり，勘三郎の息子たちを許さないどころか，ほめたたえる日本人は異常だ，という議論になった。

ではなぜ日本人はこのような思考法をするようになったのか，それを考えてみよう，というのが私の次の問題提起であった。それに対して日本の武士道との関係を指摘する学生もいた。武士道は日本の神道や仏教と関係して生まれたのか，という質問をする学生もいた。

学生の質問は多岐にわたって，授業の内容は収束するよりも拡散に向かってしまったため，まともな結論を出すことはできなかった。そこでこの場を借りて，授業で話したこと，話し足りなかったことをまとめて，留学生諸君への答にしようと思ったのが，このエッセイを書く切っ掛けである。

まず最初に，このエッセイを書く上での私の立場について述べておく。私は別に日本人論の専門家ではない。専門的な話ができるわけではない。国土は狭いようでも東西南北に延びた日本の風俗習慣はそれぞれの地方によって様々である。ただ人口密集地である東京に生まれ，東京で育って六十年以上を生きてきたわけだから，典型的な日本人の一人であるということは言えると思う。

別に地方が日本的でない，などとは少しも言うつもりはない。ただ地方にはそれぞれの特色・特異性があり，留学生諸君が将来にわたって接触するであろう日本人としては，やはり都会人であり，常に人口が集中している東京人がふさわしいだろうということだ。

もちろん東京生まれの東京育ちがみんな同じような考え方をしているなどということもない。私がここで披歴する考えに対して，「なんて常識外れな人間だ」という感想を抱く東京生まれの東京育ちも数多くいることだろう。善人もいれば悪人もいる。勇敢な者もいれば臆病者もいる。思慮深い者がいれば短慮な者もいる。政治思想も違う。自民党支持者もいれば共産党支持者もいる。しかも時代によって考え方も変わる。「今の若い者は」という言葉は，どの世代の人たちも，自分より若い世代の人たちに向かって一度は口にした言葉ではないだろうか。すべての意見を集約しようとすることがそもそも不可能なのだ。

したがってこのエッセイの内容についてはあくまで私個人の意見ということになる。そのことを留学生諸君は忘れないでほしい。しかしそのような点を考慮した上で，それでも東京生まれの東京育ちである私には，最大公約数的には，標準的な日本人を代表する一人として発言する資格はあると思うのだ。

さて中村勘三郎の話に戻るが，親の死に目に会えなくとも，舞台を大切にした勘三郎の息子たちの姿勢を（今の若い日本人はそうでもないかもしれないが），多くの日本人は肯定するであろう。しかし昨年の私の留学生クラスには，この姿勢を理解できるとした者は一人としていなかった。今年度（平成 25 年度）の学生には数名いたのだが，あまりにも予想と違う反応だったので，そのときは深く突っ込んで質問する余裕がなかった。秋学期にでもまた質問してみようかと思うが，その返答をこのエッセイに反映させられないのは残念だ。

人の死は，宗教の問題と密接に関わる。勘三郎の問題が日本人の死生観を浮き彫りにし，他の民族の死生観と違うということになれば，それは日本人の宗教観，ひいては日本人の生き方，つまりは日本人論にもつながっていく。日本は中国や韓国同様に儒教文化圏に属すると思われる。そして親への「孝」は儒教の重要な徳目として儒教圏では共通であるはずなのに，勘三郎の例が示すように日本人は特殊な考え方をしている。

つまり勘三郎の問題は，日本人の死生観ひいては宗教観の問題でもあるわけだ。本来私のような素人が口出しできるような問題ではないのだが，留学生諸君を前にして，教壇に立つ人間として沈黙を守ることはできない。素人ながらも，というよりも素人であるがゆえに平凡で普通の日本人がこのような問題についてどう考えているかを示すことも重要ではないかと思われるのだ。

繰り返すが，このエッセイは素人の意見，いや感想である。専門的なものでは決してない。専門的なことはそれぞれの学生が自分で勉強してもらうしかない。ただし専門家の意見はより正確なものかもしれないが，平凡で平均的な日本人の意見，つまり多数派の日本人の意見と必ずしも一致するとは限らない。専門家の意見が，しばしば庶民感覚と乖離しているということはよくあることだ。その点このエッセイは，専門的な知識によるバイアスのかかっていない，普通の日本人の考え方を，一つのモデルとして提供することができるという利点があるかもしれない。

留学生諸君が将来どのような方向に進むかは分からないが，日本宗教論の専門家を目指すなら，このエッセイは平均的日本人の平凡な考え方としてあくまで参考の範囲に留めるべきだろう。日本人論の専門家を目指すなら，典型的な

日本人の考え方の一つとして参考にしてもらう価値はあると思う。そして学問以外の分野，外交・貿易などの分野で将来日本人と接触することになる留学生諸君には，平均的で普通の日本人の考え方を知るうえで，参考になる面が少なからずあると思う。

それではそろそろ本題に入ることにしよう。まず中村勘三郎の死に際しての息子たちの姿勢である。ほとんどの留学生は彼らの行動を理解できなかったことはすでに述べた。ではなぜ彼らは外国人にとって不可解な行動を取ったのか。そしてなぜ多くの日本人が彼らを称賛したのか。

代役がまったく不可能だったとは考えられない。しかしお客さんは彼らの舞台を見に来たのだ。お客さんを大切にするなら，代役を立てて，父親の元へ駆けつけることは許されない。だから彼らは舞台を選んだのだ。しかし人の子である以上，舞台つまりお客さんと父と，その選択を迫られたときに，何らかの心の葛藤はあったはずだ。その葛藤は第三者である私などには想像もつかない。私だけではない。勘九郎・七之助兄弟の本音は本人以外の誰にも分からないはずだ。

歌舞伎界の人間なら，ある程度推測することはできたとしても，個人一人ひとりの心は皆違う。勘九郎・七之助兄弟の二人であっても，その時の心情は兄弟二人ともまったく同じであったとは限らないだろう。あるいは歌舞伎界で育った彼ら兄弟にはまったく葛藤はなかったということさえあり得る。しかしテレビや雑誌記者がどんなにインタヴューしても，表面に現れた姿勢以上のことを彼らが語ることはないだろう。

はっきり言うと私は今，彼らが親に会いたいという心を押し殺して，悲しみにくれながら歌舞伎界の伝統を重んじざるを得なかった，ということを前提に語っている。それが人として自然な心情だからだ。彼らは親の死に目に会いたかった。しかし歌舞伎界の伝統がそれを許さなかった。何を言いたいかというと，日本には個人の意思を押し殺さなければいけない，本意に反してそういう姿勢をとらなければならない場合・環境がしばしば存在するということ，すなわち本音と実際の行動が別々になるケースが存在するということだ。

歌舞伎だけではない，このようなことは大相撲や日本の伝統芸能の世界では

起こり得ることだ。また警察官や自衛隊員・消防隊員，つまり人の為に尽くすことを本分とする職業に就いた人々もそうだ。普通のサラリーマンであっても，会社にとって重要な局面では，親の死に目に会えないということはあり得る。戦後の経済成長期，エコノミック・アニマルと呼ばれた企業戦士たちは，家庭を犠牲にして仕事に邁進した。彼らの中には家庭に帰りたくない者もいたかもしれないが，実際に犠牲的精神で仕事に打ち込んだ者たちも少なくなかったはずだ。

私はここで歌舞伎の舞台を含む仕事関係を「公」，家庭や家族に関わる問題を「私」と呼ぶことによって議論を単純化したい。日本人は昔から「私」よりも「公」を尊重する気風を持っていた。仮に自分では実践できなくとも，「公」を尊重する人々に尊敬の念を抱いてきたのだ。

戦国時代には主君の命令で死地に赴いた武士は数多くいたことであろう。歴史上の好きな日本人，といったアンケートを実施すると，戦国時代の武将が数多く上がってくるようだ。また死を覚悟して主君の仇打ちをした赤穂義士の話を知らない日本人はいない。とにかく日本人は「忠臣蔵」の話が好きで，一昔前までは毎年暮れになると必ずドラマ化されていたほどの人気があった。彼らは「私」を犠牲にして，主君への忠義である「公」を重視したのだ。最近では東日本大震災のとき，町役場の防災広報の女性が，津波からの避難を最後まで呼びかけ続けて，自ら被災した例を思い出す。東日本大震災は，殉職した警察官など，「公」のために「私」を犠牲にした例にあふれている。

そして「公」の最大のものは国家であろう。国家のために命までも犠牲にしたという例は，二十世紀の日本にはいくらでも存在していた。日露戦争の二百三高地では，山となった味方の死骸を目の前にしても，いったん突撃の命令が降れば，内心はどうあれ，ためらう者はいなかった。これは集団狂気だったのだろうか。また太平洋戦争では，補給の乏しい南方戦線で，絶望的な戦いを強いられた兵士たちがいた。そして神風特攻隊である。

太平洋戦争末期，神風特攻隊は多くの若者たちの命を奪った。国を守るために命を賭して戦うということはどこにでもある。勝つ見込みの乏しい戦いであっても，その乏しい可能性に希望を託して戦場に向かった多くの兵士たちが

いた。しかし神風特攻隊の若者たちだけには何の希望もない。あるのはただ死だけである。出発後どうしても死にたくない者は人里離れた海岸に不時着して姿をくらますことが許されていたという説を読んだことがあるが，特攻機には護衛機が付いていたはずだから，これはちょっと信じられない。実際命永らえて帰還した特攻隊員も少なからず存在したようだが，それはあくまで例外の範疇に含まれると判断してここではあえて無視する。

すなわち彼らを待っていたのは死のみである。生還する希望は最初からゼロなのだ。彼らがそんな状況の中で死に恐怖しなかったはずはない。彼らは死の恐怖を抑え込んで，すなわち「私」を犠牲にして，お国のため，「公」のために死んでいったのだ。しかし彼らの本音は本当にお国ために死ぬことだったのだろうか。死んで靖国で再会することを本当に信じていたのだろうか。

カミカゼに似たものは現在にも存在する。イスラム過激派による自爆テロである。しかし自爆テロとカミカゼには少し違いがあるような気がする。イスラム過激派は，もちろん政治的な理由で自爆テロに及ぶのだろうが，少なくとも彼らは宗教的信念に基づいて，すなわち死んで天国に行くことを信じて自爆行為に及んでいるように聞いている。他国の他宗教の話なので本当のところは分からないが，この伝聞が正しければ，やはり神風特攻隊の若者たちとは違うと思うのだ。

戦時中の日本では天皇陛下は現人神とされ，天皇陛下のために死んでいくことは名誉なこととされていた。戦意高揚のためであろう。では天皇陛下は，戦前・戦中の日本人にとって本当に現人神だったのだろうか。彼らは本当に心から「天皇陛下万歳」と叫んで死んでいったのだろうか。戦中の日本は確かに統制国家だった。しかし心の中まで支配する洗脳国家だったのだろうか。

私の父は大正七年生まれで，終戦直前までの七年間，中国大陸北支の戦場を転々とした。電信隊に所属していたので，最前線での生きるか死ぬかの実戦の回数は少なかったそうだが，それでも四回は死にかかったそうだ。そんな戦争当時の話を子供時代の私に何度も話してくれたものだが，小人数の銃撃戦のときなどは，敵味方お互いに怖いものだから，距離をおいて打ち合うために銃弾はめったに当たらないものだとか，人間の心理としてそれが本当だろうな，と

思わせる話が多かった。

その父が戦後，私などに話をするときには，天皇陛下のことを，ふざけて「天ちゃん」と呼ぶことがあった。断っておくが，自分たちを過酷な戦場に送りこんだ天皇への侮蔑的な意味では決してなく，むしろ親しみを込めた言い方であった。しかし「天ちゃん」という言葉に尊敬の念が込められているとはとうてい思えない。いわゆる帝国軍人，それも小隊を率いる下士官という立場であった父の口から，このような言葉が出てくることに違和感を覚えて質問したことがあった。現人神というのを信じていなかったのかと。

父が言うには，あの当時は無我夢中でそんなことは考えたことがなかった，上官の言うことは聞かないと殴られるし，統制のとれた行動をしないと死ぬ可能性が高いので，とにかく上の命令を着実に実行すること以外は何も考えていなかった，終戦直前に内地に召還されていた父は，占領軍司令長官のマッカーサーが厚木に到着するらしいから突撃するぞ，と言われたときには突撃して命を捨てるつもりだった，あの当時は頭がおかしくなっていたんだ，ということだった。

無我夢中で戦争に参加していた。上官に命じられればその通り実行した。みんなが「天皇陛下万歳」と叫べば一緒に「万歳」を叫んだ。これを洗脳と呼んだとしても，戦後には平気で「天ちゃん」という言葉が出てくる程度の軽い洗脳に過ぎなかったことになる。少なくとも父にとって天皇陛下は抽象的な存在であって，命を懸けるほどの身近なものではなかったのだ。

当時の軍人にもいろいろな人がいただろうから，私の父をもって典型的な軍人とするわけにはいかないだろうが，父のような軍人がいたことは事実だし，父と同じ類型に入る軍人も相当数いたことは間違いないだろう。天皇陛下を信じているわけではない，しかし上官に命ぜられれば命も懸ける，という姿勢が身体中に浸み込んだ軍人である。

では父は何のために命を懸けようとしたのだろうか。神風特攻隊の若者たちは何のために死んでいったのだろうか。父は「頭がおかしくなっていたんだ」と言った。特攻隊の人たちも頭がおかしくなっていたのだろうか。しかし彼らは突然戦闘に突入したわけではない。死への出撃までに，いろいろと考える時

間はあったはずだ。私の父も本当に頭がおかしくなっていたとも思えない。今となっては亡き父に問いただすこともできない。以下は父の話を子供のときから何度も聞かされてきた私の推測である。

一言で言えば，天皇を現人神とする意味での国家神道は破綻していた。戦時中，多くの軍人は，天皇が象徴する何かのために，例えば国家や家族のために命を懸けたかもしれないが，天皇個人のために命を懸けたのではない。国家神道が象徴する統制国家の強制の中で自由を奪われ，上官の命令のもとに命を懸けざるを得ない状況に置かれていたのだ。宗教心に基づく行動ではなかった。そこに千数百年の長い伝統の中で信仰心を植え付けられていたイスラムの自爆テロとの大きな違いがある。明治になって生まれた，歴史の浅い日本の国家神道にそんな力はなかったのだ。

しかし戦中の日本人に宗教心はまったくなかったのだろうか。神風特攻隊や，サイパン・硫黄島などで玉砕していった人たちは，自由を奪われ，ただ惨めに死んでいっただけなのだろうか。もちろん死の恐怖に震えながら惨めに死んでいっただけの人たちも多かったことだろう。しかし誇り高く，少しでも母国の役に立てることを願って死に立ち向かっていった人々も少なくなかったはずだ。その彼らの心を支えていたものは何だったのだろうか。

「靖国で会おう」という言葉がある。戦争に生き延びて靖国神社で再会しようという意味ではない。国のために戦って死んだ魂は，英霊となって靖国神社に祀られることになっていた。つまり「靖国で会おう」とは，英霊となって再会することであり，お互い励まし合って国のために命を懸けようという戦友たちの合言葉だったはずだ。

ただしそれには魂の存在を前提にしなければならない。魂が存在しなければ，靖国に英霊として祀られることもない。戦中の軍人たちは，天皇を信じられないとしても，魂の存在だけは信じて，靖国で祀られることを信じていたということになる。それとも魂となって戦友たちと再会できることを，信じられないながらも信じたいという単なる願望として抱いていたのだろうか。

ここで宗教心が薄いと言われる戦後の日本人について考えてみよう。現代の日本人は，初宮参りは神社に行き，結婚式はキリスト教式で，葬式は仏教式で

行なうという，宗教的に無節操な点が指摘される。統計があるかどうかは知らないが，戦前の日本人の方が圧倒的に宗教心は強かったであろう。父が神棚に向かって柏手を打ち，仏壇に線香をあげて手を合わせているとき，子供時代の私は，そばでゴロっと横になって本を読んでいたものだ。

統計を見ても現代日本人の宗教意識は薄い。国際比較では世界でも最低の部類だ。日本人の学生に，神を信じている者はいるか，と聞いてもほとんど誰も手をあげない。たまに熱心なクリスチャンや，熱烈な新宗教の信者が手をあげるくらいだ。少なくとも都会の学歴ある現代日本人では，無宗教派が圧倒的に多い。

その理由としては，科学文明絶対の戦後の教育に原因があると思う。昔のお年寄りは，お墓参りは欠かさなかったと思う。墓参りに行かないと気分が悪いようだ。昭和六年生まれで私の住むマンションの管理人をやっていた人は，奥さんに先立たれてから三年間は，二日に一度の墓参りは，台風でも来て電車が止まらない限りは決して欠かさなかったものだ。もちろんお墓まで片道三十分という利便性もあったろうが。

また科学文明絶対の時代に，科学で証明できない神や仏を信じていると言明することに対する気恥ずかしさがあると思う。特に新宗教は，昔は新興宗教と呼ばれて，淫祠邪教の類と考えられていた。特に昭和三十・四十年代に強引な勧誘や神棚の破壊などをした教団や，平成になってのオウム真理教事件で新宗教の評価は失墜した。輸血拒否事件で子供を死なせてしまった教団が話題になったこともある。これら非社会的な教団は宗教界全体から見れば少数派と思われるのだが，世間はみな十把一絡げで考える。うちの近くの小学校のある先生は「宗教は悪いものだ」と教えているそうだ。

学校の先生が「宗教は悪いものだ」などと教えていると聞くと，海外の多くの国では，特にアメリカ人などはびっくりしてしまうだろう。何しろアメリカは世界一信仰心の篤い国で，善悪の原点は神にあり，道徳は宗教から生まれると信じている国だ（実際にはイスラムの自爆テロに見るように宗教と道徳は一致しない）。日本人がアメリカへ行って，自分は無神論者だ，などと言えば，「こいつは善悪の基準を持っていないのか，無政府主義者なのか，何をするか分からな

いではないか」などと疑いの目で見られてしまう。

私の近くの小学校の先生の「宗教は悪いものだ」という言い方は，実際にこのような表現を使ったかどうかは確認していないが，これは独善的な考え方で，世界的には少数派の意見だと思う。しかしこのような言い方が，学校教育を通して世間に広まると，伝統宗教も含めて宗教全般が悪いものだと考えられてしまう。墓参りくらいは習俗習慣の範囲で許容されるだろうが，家の外にまで聞こえるような声で毎日お念仏やお題目を唱えていたら，まず変人と思われてしまう。

とにかく現代の日本では，特に都会では，非科学的なものを信じている人間を馬鹿にする傾向がある。これでは信仰を持っていたとしても，変人扱いされるのが嫌で，自分は神なり仏なりを信じていると，堂々と手をあげる学生はいないだろう。例外はクリスチャンで，伝統的なキリスト教は西洋科学文明という背景を背負っているからだろうか，別に奇異な目で見られることはない。近代科学文明発生の地でりっぱに認可されている宗教は別格というわけだ。

つまり日本人の学生に手をあげさせてみても，あるいは世論調査をしてみても，日本人の本当の宗教心はよく分からないということだ。都合が悪いときには，日本人はすぐに本音を隠してしまう。そもそも宗教の定義が難しい。お墓参りに行くのは宗教なのか，風習なのか，毎朝神棚に初水をあげて柏手を打つのは宗教なのか，習慣なのか，形だけ見る限りでは判断がつかない。

私個人の場合，墓参りに行くのは義理と世間体である。あくまでお寺さんとのお付き合いのつもりだ。お墓に両親の霊が宿っているとは考えていない。私はどうも日本仏教は好きではない。しかし墓前でご両親の魂と真剣に語り合っている人もいるだろう。つまり墓参りという形だけを見ても，その人の内面にある宗教心は分からないのだ。形ではなく，心の問題ということになる。墓参りはお寺さんや世間の目があるから，本人の心に聞いてみなくては分かりようがない。

自宅の神棚に初水をあげるのには世間の目は関係ない。本人の素直な心を反映している可能性が高い。しかし世間の目はなくとも，家族の目を気にしている場合もあるかもしれない。一人で生活していて初水をあげている者なら形だ

けで宗教心があると判断できるかもしれないが，親の代からの習慣をただ大切にしているという場合もあるかもしれない。この場合は神棚に祀った神様よりも，親への敬慕の心が宗教的な形を取らせているだけで，宗教心があるという証明にはならない。

「葬式仏教」という言葉がある。庶民との心の繋がりを絶った，葬儀という形式だけの繋がりしか持たない現代日本の仏教を揶揄した言葉だ。日本の葬式はほとんどが仏式だ。お坊さんが来てお経をあげる。会葬者はお焼香をする。遺族代表が挨拶をする。遺体は火葬場に運ばれて荼毘に付される。精進落しと称して食事と酒が出される。大体こんな段取りだ。それも葬儀社に希望と予算を伝えておけば，斎場の確保から料理の注文から，司会や案内までほとんどやってくれる。

どこの国でも葬式はあるはずだ。よほど貧しい国ならば，遺体を放置したまま鳥獣の餌にするしかないかもしれないが，普通なら葬式はある。ではなぜ日本ではその葬式が「葬式仏教」という言葉で揶揄されなければならないのか。葬式自体が利潤追求の営業のように思われているからだ。

葬儀社は民間企業だ。利潤を追求するのは当り前だ。遺族や会葬者にできるだけ気持ちよく故人を見送らせてあげる。そのためのサービスを提供し報酬を得る。当然のことだ。しかし僧侶はどうだろう。お寺によってかなり差はあるものの，読経料・戒名料などの報酬を得る。戒名料を取らない宗派・寺院もあるが，戒名の長さ・尊さによって値段が違うという実態もある。お布施の額で読経の長さが違うという話も聞く。あまり長いのは疲れるが短すぎては葬儀に重みが感じられなくて寂しい。「お気持ちだけで結構です」と言われてもつい余分にお布施を包んでしまう。つまり金銭を出す側の普通の日本人には，寺院・僧侶も葬儀社と同じように感じられてしまうのだ。

普段から親しくしているお寺さんなら，また普段から墓参りも欠かさないまじめな檀家なら，葬儀でお世話になる以上，感謝の気持ちでお布施を包むことに抵抗はないだろう。しかし都会の日本人は，特に核家族化した現代の日本人は，普段お寺さんとの付き合いはない。葬式のときだけの付き合いという場合が少なくない。それでいて葬儀社に払うのと同じような額を，お坊さんにも包

まなければならないとすれば，つい「葬式仏教」と揶揄したくもなるというわけだ。

そもそも葬儀のときに読んでくれるお経が有り難いものかどうかがよく分からない。大体半分は漢文，半分は文語文で，聞いていても何を言っているのかほとんど分からない。なかには一緒になって朗唱する熱心な年配の方たちもいるが，その人たちの大部分もお経の意味は分かっていないと思う。意味も分からないで有り難がっているのだ。その他の人は意味も分からないものを長々と聞かされて退屈しているのが大半だろう。

読経だけでは有り難みが伝わらないと考えたのか，葬儀や法事の読経の後に，講話をするお坊さんが増えてきた。なるほどと思えるような話ばかりなら良いけれど，仏教の知識を羅列するだけのようなお話もある。これではやはり退屈だ。

ところで平均的な日本人は仏教の教義をどのくらい理解しているのだろうか。お釈迦様の教えと言われる十二因縁や四諦八正道についてどのくらい知っているのだろうか。よくて「そんな言葉を聞いたことがある」程度のものだろう。まったく聞いたこともないという日本人も少なくないかもしれない。日本人の理解している仏教は，お彼岸はお墓参りに行く時期で，お盆には先祖の霊が自宅に帰って来る，だからみんなが郷里に帰る，程度のものではないだろうか。そもそもこれは仏教ではない。言葉自体は仏教にもあるが，その内容自体は日本古来の習俗である。

つまり日本の仏教は，本来の教義を信者に啓蒙することをなおざりにして，日本人の好む死者儀礼，つまりお彼岸やお盆，葬儀や法事などに乗っかって発展してきた。釈迦仏教においては僧侶が葬儀に関わることはなかったのだし，日本に伝来してきたころの仏教も，鎮護国家が目的で，葬式などは存在しなかったのだ。それがいつのころからか鎮護国家のためには怨霊調伏が必要となり，怨霊調伏に関係して死者の供養が重要視され，供養のために仏式葬儀が生まれる，といった経過を辿ったと思われる。

そして現代の日本の仏教は，信徒の側から極端に言わせてもらえば，教義を忘れて死者儀礼のみに専念しているとしか思えない。それが「葬式仏教」と言

われるゆえんであろう。しかしそれがすべて悪いと言っているわけではない。現実問題として，誰か葬儀に手を貸してくれる者がなくては困る場合があるのは事実なのだ。

現代では無宗教式の葬儀も数々あるわけで，この場合などは葬儀社だけにすべて任せてしまえば良いということになる。ところが宗教心が薄いと言われる日本人だが，それだけでは何か物足らないと感じる日本人の方が，まだまだ多いように思われるのだ。つまり日本人は死者，そして先祖を大切に思う気持ちが意外と強いようなのだ。

多くの日本人の家庭には仏壇がある。核家族化した現代の都会では少なくなったかもしれないが，基本的には仏壇はあると言ってよい。次男以下に生まれた男性が独立して家庭を持った場合には仏壇はないかもしれないが，その家庭に死者が出れば普通は仏壇を買って死者を祀る。一昨年亡くなった私の叔父は八人兄弟の末っ子だったが，生前から墓所だけは自分で用意しておいたし，遺族は新たに墓石を建てた。

「葬式仏教」などと言って仏教をバカにするけれど，どうも日本人は仏教とは相性が良いようだ。日本固有の宗教は神道であるが，神道では普通葬式をしない。するようになったのは主に明治になってからだが，数は少ない。葬式がなくては不便だし，先祖を大切にできないようで気分が悪い。そこで江戸時代に寺請制度が制定されたことにより，外来宗教である仏教による葬儀が庶民の生活に定着する。神仏習合していた江戸時代までの神道は，葬式は仏教に任せてしまっていたのだ。

そもそも神道では死者を穢れとする。そのため穢れを清めるための「清め塩」を必要とする。塩には防腐作用がある。死体は腐敗する。くさい。汚い。これが穢れだ。もちろん専門家は，穢れと汚れは別物だと言うだろうが，一般的にはそう理解されている。

日本神話でイザナギ命は亡くなった妻のイザナミ命に黄泉の国まで会いに行くが，イザナミの腐った死体を見て，追いすがるイザナミを振り払って逃げ帰ってくる。そして水をもって穢れを清めるわけだ。水で汚れを洗い流すように，防腐作用のある塩も清めの役割を果たすことができる。

従って日本ではあちらこちらで清めの塩にお目にかかることになる。大相撲の土俵を清めたり，地鎮祭では土地を清めたりする。嫌な人がやってきたら，帰ったあとで塩をまく。これも清めだ。葬式でも同じだ。仏式であっても「清め塩」が付けられる場合がほとんどで，これは本来は神道的な考えに基づくものなのだ。そのため最近では浄土真宗を中心に「清め塩」を使わない傾向が増えている。

つまり清めの塩は死者を汚いものと見る証拠である。しかし現代の日本人で，葬儀からの帰宅時に我が身を塩で清めないうちは玄関から入らない，という人はどのくらいいるだろうか。都会の若者などはまったく無視してしまっていることだろう。「清め塩」の意味さえ知らないかもしれない。また遺体に死化粧をほどこしたりする習慣は，遺体が汚いからきれいにしようというよりも，遺体を大切にしたいという気持ちから生じているのではないだろうか。つまり現代日本人は死者を穢れとはみなしていない，ということにならないだろうか。

古代においてはイザナギがイザナミを穢れとみなしたように，死は穢れであった。死体が汚いというだけではなく，死という概念そのものが穢れであった。古代ではモガリといって，死者の死を確認するために長時間，遺体の埋葬を遅らせる風習があった。現代のお通夜に通じるものだろう。現在では葬儀の日までお棺の中にはドライアイスが詰められている。ドライアイスのなかった昔では遺体は腐り，腐臭を発する。死者は穢れであり，古代においては忌み嫌われる存在であったということになる。

その証拠に古代においては怨霊という考え方があった。怨霊というと堅苦しいが，簡単に言えば幽霊・お化けである。死者が霊となって地上に残り，生きている人間に祟るのである。特に変死した者が怨霊となって人間に悪さをする。場合によっては命を奪う。死者は恐ろしい存在であった。

そのため古代の上流階級は死に関わることを嫌い，実際平安時代には死刑が執行されない時期が長期間続いたこともある。また剣を取っての争いすら嫌うようになった。貴族が剣を握るのは『古事記』に描かれた時代から七世紀後半の壬申の乱くらいまでであろう。

それでも欲の渦巻く現世に争いの絶えることはない。上流階級つまり貴族たちは，下の階級の者たちに自分たちの代わりに剣を取らせた。これが武士の起源である。貴族たちは穢れた存在であるとして武士たちを軽蔑していた。しかし武力を持った武士たちが，武力を捨てた貴族たちから実権を奪っていくのは歴史の必然であり，それが平安後期から始まった貴族政権の没落と，鎌倉時代の武家政権の確立という皮肉な結果を生む。

話が少しそれてしまったが，日本人は昔から霊の存在を信じてきた。少なくとも昭和前半までの日本人の多くはそうだったと考えられる。私の父母や叔父・叔母の世代だ。私が見る限り彼らは先祖の霊を信じて敬ってきた。ただし一般庶民の場合だ。大学出の知的エリートはまた別の考え方をしていたかもしれないのだ。戦前の大本（教）などは大勢の貴族・軍人・学者などが信者として集まってきていた。しかし知的エリートにはどうしても物事を合理的・科学的に考える傾向があるため一般庶民と同列には考えられない。

特攻隊員は，即席であろうとも飛行機を操縦するのだから，知的エリートであったはずだ。彼らも霊の存在を信じて，心から「死んで靖国で会える」と思っていたかどうかははっきりしない。「靖国で会おう」と口では述べても，それが本心であったかどうか，死んでしまった人間に聞くことはできないのだ。しかし彼らの周りの一般庶民たちはそれを信じていたし，彼らも自分の死を犬死にはしたくなかったはずだ。だとすれば国のために死んで，靖国に英霊として祀られることを，願望のレベルではあっても信じたいと思っていたことだろう。つまり日本人は，天皇は信じていなくとも，霊の存在だけは信じたいと思っていたのだ。

平成の日本人はどうだろう。教科書から神話がなくなり，科学文明の洗礼を受けて育った世代の多くは無神論者であろう。それでも庶民感覚としては墓場に行けば何か不気味な感じを受けるものだ。現代人であっても夜の墓場は怖いだろう。お化けなど信じていなくとも何となく怖い。墓地が不気味なのは恐らく日本人でなくとも同じだろう。墓地には死という暗いイメージが付きまとっているからだ。

しかしお彼岸には墓参りする日本人は多い。墓石をきれいに洗って，花を生

けてからゆっくりとお参りをする人は今でもいる。そこには明るい雰囲気がある。昼間だからだろうか。昼間だからといって広い墓地にたった一人でたたずんでいたらどんな気持ちがするだろう。確かに夜に墓参りをする人はいない。夜の暗闇が恐怖感を増幅させるのだろう。特に夜の墓場で，風に揺れてカタカタと音を立てるお塔婆は不気味だ。昼と夜の差，確かにそれもあるが，果たしてそれだけだろうか。

路上で見知らぬ人にうっかりぶつかってしまったとする。相手は「気をつけろ」と怒鳴る。不注意はお互い様であっても，相手はヤクザかもしれない。そう思ったら謝ってそそくさと立ち去るのが普通の日本人だ。しかし相手の顔をよく見てみると小学校時代の同級生だ。「やあ，なつかしいなあ」と，怒鳴り，怒鳴られたことも忘れて旧交を温める。どこに違いがあるのだろう。

見知らぬ他人は不安だ。身体も小さく，一見ケンカしても勝てそうな相手でも，武道の心得があるかもしれない。最近の若者はキレやすく，凶器を携帯しているかもしれない。「触らぬ神に祟たりなし」である。日本人は農耕民族で，知り合い同士の共同生活に馴染んできたせいか，未知の人間に対して必要以上の警戒心を抱く。しかし知り合いなら話は別だ。昔馴染みの気安さと，どんな人物かを知っている安心感がある。

墓場にいても，自分の先祖代々の墓なら親しみがもてる。自分をかわいがってくれた両親あるいは祖父母が眠っている墓だ。きれいに磨き上げたい気持ちにもなる。他の墓にはどんな人間が埋葬されているのかは分からない。もしかしたら殺されてこの世に未練を残している霊が，幽霊となってさまよっているかもしれない。そういう幽霊は人に悪さをする。取りつかれて殺されるかもしれない。つまり怨霊である。

自分の家族の魂なら，生前家族仲が悪くて，お互い殺したいほど憎んでいたのでもない限りは，むしろ自分を見守ってくれる有り難い存在だ。そんな家族の霊でも，幽霊となって地上をさまよっていればやはり怖い。何かこの世に未練があり，やり残したことをやろうとして，何をするか分からないからだ。幽霊は超自然的な存在だ。超自然的な存在には常識が通用しない。ヤクザと同じで何をするか分からない。だから怖い。

だからお坊さんに読経してもらって供養をする。初七日，三十五日，四十九日，一周忌，三回忌，みんなこの世に幽霊として留まらず，あの世に成仏してくれと願ってのことだ。成仏してくれた親・先祖は有り難い。子や孫を見守って，場合によっては助けてくれると信じられるようになった。

私の母方の叔母は，私の父がガンの手術をするとき，すでに亡き姉，つまり私の母の墓へ行って手術の無事を祈願してくれた。死んだ人間は未知の世界に旅立ったと考えられる。未知の世界の存在には超自然的な力が備わっていると昔の人は考えた。叔母ばかりではなく，親・先祖に願い事をする日本人は多い。つまり死者を恐怖の対象と捉えるのではなく，守護者とみなすのだ。しかしもし母の墓前で手を合わせている叔母の前に，母が幽霊となって現れたら，恐れ慄いて「早く成仏してくれ」と悲鳴をあげていたことだろう。

この場合の「成仏」は日本仏教特有の使い方だ。本来なら悟りを得て，仏陀になるという意味だが，日本語ではこの世に未練を残さずあの世に行くことを意味する。この世に未練を残している霊は怖い。超自然的な力を振るって何をするか分からない。だから成仏してもらわなくては困る。

お通夜やお葬式にはお香典を持っていくのが通例だ。その場合，「御霊前」と書かれた不祝儀袋に金銭を包む。一般的には四十九日の法要からは「御仏前」と書かれたものが使われる。正式には四十九日までは毎週のように供養のための法要があるのだが，俗世の人間は忙しくてとても毎週はやっていられない。そこで三十五日か四十九日に納骨式を兼ねての法要をして，次は一周忌ということになる。初七日の法要というのもあるが，死去からの日数に関係なく，大体は葬式のときに一緒にやってしまう。便利な時代だ。

ところでお香典の表書きが「御霊前」から「御仏前」に変わったということは，まだこの世で迷っていたかもしれない霊が，仏様に変わったということだ。これが「成仏」だ。日本語の「ほとけ」は，本来は単に親・先祖のことを指すという説もあるが，「最高の真理を悟った尊者」という仏教的意味の「仏」という字があてられたため，「仏様」という有り難い存在に格上げされてしまった。だから死人のことを丁寧に「仏様」と呼ぶ。日本語の「成仏」も「仏様」も本来の仏教とは意味内容が異なってしまった。

だいぶ横道に逸れてしまったけれど，言いたかったことは，親・先祖の墓には親しみを感じるということだ。だから怖くない。当り前だと言われそうだが，親しみを感じたり，怖いと思ったりする対象は墓石自体ではない。埋葬されている霊に対してのはずだ。つまり無宗教と言われる現代日本人も，無意識のうちに霊の存在を信じているのではないかということだ。

昨年の秋学期が始まるころから，NHK の朝のテレビ小説で『純と愛』というのをやっていた。主人公の純は，悩みごとがあったりするといつも「おじい」「おとうちゃん」と亡くなった祖父と父に語りかけていた。この場面を見て違和感を覚える日本人はいないと思う。もちろん精神分析的にはいろいろな説明ができるのだろうが，素直に祖父や父の霊に語りかけていたと取って構わないのではなかろうか。

日本人は宗教心が薄い。しかし普段は無宗教のように見えても，何かあれば親・先祖の霊に語りかける。特別に仏教を信じているわけではない。教義もお経の意味も分からないのだから。神道を信じているわけでもない。神道には教義はないし，お祭りに参加するだけのものと思っているのが普通の日本人だからだ。でも無意識のうちに霊の存在，特に親・先祖の霊を信じているようなのだ。

ここで留学生諸君のために日本固有の宗教と考えられている神道について言及しておくのが親切だと思う。ところがこの神道については大部分の日本人がよく知らないというのが実情だと思う。今述べたように教義はない。神官はいても教えを説くわけではない。そもそも経典がない。経典に近いものとしては『古事記』や『日本書記』の神話の部分だが，神話は神話に過ぎない。エロティックで下品だと言った外国の学者もいるくらいで，とても経典とは呼べそうもない。

では教義も経典もない神道にあるものといえば，神社である。『古事記』を読んでも神道は分からないが，神社を見れば多少は神道のことが分かるかもしれない。最近は都会の神社も近代化して，鉄筋コンクリートのビルの中に収まっているものまであるが，基本的に神社は自然の中にある。「鎮守の杜」という言葉がある。この場合「森」ではなく「杜」と書くのが普通だ。いずれに

せよ森に囲まれた自然の中にあるのが神社の基本形だろう。

ではこの神社の中で最も大切なものといえば，その神社に祀られている祭神だろう。その祭神は二種類に分類できる。一つは山の神・川の神・風の神などの自然神だ。神道は自然界を崇める自然宗教なのだ。日本という風土の中で，日本人は自然現象の影響を強く受けてきた。日本では火山の爆発が多い。地震もあれば台風も来る。どうしても自然の影響を受ける。梅雨時に雨が降らなければどうなるか。収穫時に台風が来ればどうなるか。農耕社会を営む日本人にとっては自然こそ畏れ敬うべき重要な存在であり，神だったのだ。ご神体として石や木など自然の物が祀られている例は数多くある。日本人にとって自然こそ神だったのだ。

祭神の第二は人間である。明治神宮は明治天皇を，日光東照宮は徳川家康を，天満宮は菅原道真を祀っている。他にも豊国神社・東郷神社・乃木神社など，歴史上の有名人物を祀っている神社は数知れない。では『古事記』などの神話に登場する神々はどうなのだろうか。その多くは天皇家や名門貴族の先祖である。天皇家の先祖を辿れば天照大神に辿りつくのだ。人間の先祖ならば，その正体は当然人間であろう。つまり神話の神々を祀る神社も，実のところ人間を祀っているに過ぎないのだ。恐らく神社の形態としては自然神信仰が先にあり，後に人間神信仰が付随して発生したのであろう。言い換えれば神道には自然宗教の一面と先祖崇拝の一面があるということだ。

氏神様というものもある。これもその地方の氏，すなわちその地方の共同体の，有力な氏族の先祖を神として祀ったものと考えられる。つまり日本人は儒教が「孝」の概念を伝え，仏教が葬式を請け負うようになって先祖供養の役割を担う，はるか以前から，先祖崇拝を自分たちの信仰としていのだ。

ところで神道とか神社という言葉から，現代の日本人は何を連想するだろう。自然崇拝や先祖崇拝だろうか。いや恐らく一番目はお祭りだろう。夏祭り・秋祭りなどのお祭りだ。神輿を担ぎ，エネルギーを爆発させるお祭りだ。あとは新年の初参りとか，節分祭，これもお祭りの一つだ。それから七五三などが主だったものではなかろうか。これは日本人にとっては宗教というよりも風俗習慣に近い。大体何のためのお祭りか，都会の現代人は祭りの起源など

すっかり忘れてしまっているのではないだろうか。自然崇拝や先祖崇拝，それが神道だといってもピンと来ない人の方が多いのではなかろうか。

それでも日本人は昔から先祖を，死者を大切にしてきた。これは現代の日本人でもそうだ。だから仏教を信じていなくとも，葬式だけはやるはずだ。意味の分からないお経を退屈に思いながらも，葬式だけはやるものだ。原則的にはお役所に死亡届を出して，火葬・埋葬許可をもらえば葬式をやる必要はない。火葬はしないと死体遺棄になってしまうだろうが，火葬をした後は，遺骨を押入れにしまっておこうが，ゴミとして捨ててしまっても罪にはならない。実際押入れにずっとしまっていた人が近所に一人いた。ただしその人はそのほかの面でも世間から変人扱いされていたのだが。

そういう変人は除いて，普通の日本人は葬式をやる。仏教を信じていなくても仏式の葬式をやる。理由は二つ考えられる。一つは世間体であり，もう一つは明確にではなくとも，何となくではあっても，霊の存在を心の底では信じており，故人の霊を大切に思う気持ちからだ。第一の世間体もまた，世間から「あの家では親が死んでも葬式もあげない。なんて親不孝なやつだ」などと言われるのを恐れるからだ。つまり日本人は，霊の存在を信じていようが，信じていなかろうが，親・先祖を大切にする民族ということになる。少なくとも世間は，みんなが親・先祖を大切にすることを期待している。

何となくでも良いから霊の存在を信じていれば，親・先祖の霊が，天国だか，極楽だか，どこでもいいから幸せになってほしいと願うはずだ。また本心では霊の存在を否定していても，親・先祖を大切にして葬式をあげ，供養の法事も欠かさないようにしないと，世間から「あいつは変人だ」と思われてしまう。言い換えれば，世間つまり日本の社会は，本音か建前かは別にして，親・先祖を大切にすることが常識となっている社会なのだ。

したがって日本人の多数派，変人を除いた多数派は，親・先祖を大切にする。これは儒教で言えば「孝」ということになる。ではなぜ勘三郎の子供たちは，親より仕事を優先して誉められるのか。中国や韓国の「孝」とどこがどう違うのか。やっと話が一巡してきたようだ。

儒教で「孝」に対立する概念は「忠」だろう。中国や韓国では「孝」の方が

重要視されるが，日本の，少なくとも日本の伝統的社会では「忠」の方が重視されていると考えられる。ここで武士道が登場することになる。

先ほど日本人に人気の「忠臣蔵」について言及した。文字通り「忠臣」についての物語だ。大石内蔵助をリーダーとする赤穂藩の浪人たちは主君の仇を討つために家族との縁を切り，恋も捨てて目的を成就する。リーダーである大石の例で言えば，長男だけを連れて討ち入りし，妻や幼い子供たちとは討入の前に縁を切る。主君への「忠」が家族への「私」の心よりも優先される。当時の日本人にとって「忠」こそが最大の美徳だったからだ。

だからこそ彼らは「忠臣」として，あるいは「義士」として日本人に非常に人気がある。もちろん敵役の吉良上野介には何の欠点もなく，赤穂藩主浅野内匠頭が単に暗君だったとする否定的な説もあるが，とにかく日本人は昔から赤穂浪士の大ファンであった。ではこの事件から何を読み解くことができるだろうか。

まず討ち入りに参加したのは四十七名ということになっている。では赤穂藩改易のとき，どのくらいの藩士がいただろうか。専門書にあたったわけではないが，およそ三百名と言われている。つまり主君の仇打ちに参加して「忠」あるいは「義」を貫いた武士は全体の六分の一ということになる。足軽など軽輩の武士を藩士の数から除けば四分の一程度が残ったことになるだろう。

これを多いと見るか，少ないと見るかは人によって様々だろうが，「忠」を貫いたのが少数派であることだけは間違いがない。例外的とは言えないまでも，少数派でありながら「義」を貫いたがゆえに彼らは称賛されてきたのだろう。その反対に途中で脱落し，討ち入りに参加しなかった者たちは，映画やドラマでは悪役として扱われる。そしてその悪役が多数派なのだ。我が身に置き換えてみたらどうだろう。自分は英雄になれるのか，それとも悪役の一人か。

つまり多数派の日本人は「忠義」あるいは「公」の概念を尊重しながらも，結局は「私」を優先してしまうのだ。誰もが自分が大切なのだ。むしろ六分の一もの武士たちが，自分の命を捨てても主君の仇を討とうとしたこと自体が驚きに値するのだ。それに対して，自分たちの偉業を世間は評価するはずだ，まさか死罪にはなるまい，生き残ってどこかの藩に仕官できるのでは，と甘く考

えていたなどとする説もある。実際幕府内には彼らを忠義の士として赦免すべきだという声もあったようだが，実際には全員切腹だ。

つまり日本人もまた本質的には「公」よりも「私」を重視する民族だということだ。ただしそれには条件がある。「赤穂義士」は「赤穂浪士」とも呼ばれるように浪人である。元赤穂藩士ではあっても浪人に変わりはない。つまり赤穂藩士としての縛りのない自由な立場にいたと言うことができる。自由な立場にいるとき，日本人は「公」よりも「私」を重視するのだ。

ただし彼らは完全に自由な立場にいたわけではない。彼らは赤穂藩士ではなかったが，元赤穂藩士という肩書は付いてまわった。この肩書も一種の縛りである。この肩書ゆえに世間から，元主君への仇打ちが期待されるという面があった。そしてその期待に応えた，あるいは応えざるを得なかったのが全体の六分の一にあたる四十七人の浪士だったのだ。

では赤穂藩が取り潰しにならずに，存続していたらどうだったろうか。その場合は新主君への忠誠が優先されるという大義名分で，旧主君への仇打ち参加者は圧倒的に減ったと思われる。実際に討ち入りした赤穂浪士たちもお家再興派と討入急進派に分かれており，大石内蔵助もお家再興派だったのだが，お家再興が無理と分かって討入を決断したのだ。

一般論として，江戸時代において主君と藩のどちらが大切に思われていたかと言えば，圧倒的に藩の存続であった。藩がなくなれば藩士たちはみな浪々の身となる。つまり食べていけなくなるのだ。だからこそ主君の血筋を廃して将軍家の血筋から養子をもらったり，幕府に睨まれている暗君に一服盛ったり，といった時代劇のテーマになりそうな不忠な行為が実際に行なわれていたようなのだ。藩の存続すなわち藩士たちの生活，これが第一だったのだ。

主君への「忠」よりも自分が第一，これは戦国時代の「下剋上」という言葉に典型的に見ることができる。この主君に仕えていては戦国の世を生き延びることはできない，と思えば平気で裏切ることができるのが戦国時代だった。もちろんそれなりの活躍をすればそれなりの報酬は期待できる。つまり戦国時代の武士たちは主君と家臣たちの利害関係で動いていたのだ。

それが平和な江戸時代に入ると，武士たちは戦場という働き場を失う。いざ

という時のために剣術修行に励むくらいで，農工商の人たちに比べればろくにやることもない。そもそも剣術修行もあまり意味はない。織田信長が大量の鉄砲を戦場に導入して以来，刀が鉄砲に勝てないことは常識になっていたはずだ。いざという時のためには鉄砲の練習でもしていた方が良かった。幕末の坂本竜馬が，千葉道場で学んだ剣の達人であるにもかかわらずピストルを手放さなかったのは彼が常識人だったからだ。

平和な時代の武士たちの中には学問に精を出す者たちもいた。江戸時代は儒学，特に朱子学の影響の大きかった時代だ。儒教的道徳観を取り入れながら平和な時代の武士の存在意義やあり方を模索する者たちもいたことだろう。徳川幕府は下剋上の時代の再来は望んでいなかった。そのとき幕藩体制の永続性を目的として，儒学者たちに儒教の徳目の一つである「忠」を最重要視するよう政治的な圧力をかけるようなことがあったかもしれない。こうして生まれたのが，本場中国の儒教とは違う日本独特の儒教であり，武士道ではなかったろうか。

つまり武士道とは，幕藩体制維持のために，武力が無用となった時代の武士に，存在意義を与えるための武士の理想像として生み出されたのだ。その中核は儒教道徳に禅仏教をプラスしたものだろう。死を恐れることなく，常に正々堂々として，忠義のためにすべてを尽くす，こんな武士のあるべき姿を描いたのが武士道だと思うのだ。あるべき姿であって，現実の姿ではない。上杉謙信のように敵に塩を送っていたら，逆に自分たちの一族郎党が滅ぼされる可能性があったのが戦国時代だ。新渡戸稲造が『武士道』の中であげる武士道の体現者たちは，それが例外的存在だからこそ歴史に残ったのだ。

武士道は当初は幻想ではあったが，理想的幻想はその理想的という魅力によって人々を縛ることができた。武士道は，明治以降の軍人には武人としてのあり方の模範として，強く脳裏に刷り込まれていたことだろう。士官の多くは武士階級出身だったかもしれないが，兵士の多くは農民であり，武士ではなかった。その彼らも，大日本帝国軍人の立場に立ったとき，武士道の規範から外れることを恐れ，勇敢に戦い，そして死んでいった。これは武士道という概念による縛りである。武士道は実際の武士たちよりも，明治以降の軍人たちによっ

て体現されたということができるかもしれない。

刀が鉄砲に勝てないように，戦力に差があれば普通は勝てはしない。織田信長が桶狭間の合戦で勝利したときのような奇襲しかない。真珠湾攻撃は桶狭間の再現を求めて決行された夢の追求に過ぎない。これもまた幻想である。幻想はしばしば人を動かす。元寇のときの「神風」の再現を求めて神風特攻隊が結成されたのもその例だ。帰りの燃料を持たない神風戦闘機に搭乗する兵士たちにも，幻想に過ぎない武士道精神は刷り込まれていたことだろう。だからこそ彼らは死の恐怖に勝利したとも言える。しかし彼らを縛り，死に追いやったものは武士道的軍人精神だけだったろうか。私はもっと大きな縛りがあったと思う。

日本人は混血民族である。南方から西方から，そして北方からも極東の島国である日本に多くの民族が流れ込んでは混血していったと思われる。アメリカ合衆国は，昔は「人種のるつぼ」と言われたが，今は「サラダボール」と呼ばれる。多民族が混在してそれぞれの個性を発揮しているからだ。しかし日本こそ本当に「人種のるつぼ」かもしれない。極東の島国に多民族が集い，数千年の歴史を経てるつぼの中で掻き回されるようにして今の日本民族は生まれたのだろう。

今は廃れてしまったが，昔は「騎馬民族征服説」などというのもあった。天皇家の先祖は朝鮮民族だったという説もあれば，日本人はユダヤ人の失われた十部族の子孫だという説もある。昔のことは誰も証明はできないだろうが，『古事記』を読む限り最終的な支配階層は南方系だったと思われる。しかし生活形態としては弥生時代以来現代まで，日本は一貫して稲作文化の国であった。

古代の稲作農業は多くの労働人口を必要とした。田植えの時期，刈入れの時期も決まっていた。稲作は共同作業であり，必然的に共同体を必要とした。それも狭い農地を効率的に使用するため，また自然災害とも闘うために団結力の強い共同体が必要であった。つまり弥生時代以来長い間，日本は農耕村落共同体社会であり，強い団結力を必要としていたのだ。強い団結力を持った共同体は疑似家族となる。疑似家族の成員は身内であり，安心して付き合える人間で

あって，外部の人間とは一線を画すことになる。

注意すべきは外部の人間だけではない。身内であっても団結を乱す者は共同体全体に危険をもたらす可能性がある。稲作農業においては統一された行動が大事で，それを乱す者，つまり共同体のルールを守らない者は危険分子として排除されなければならない。それが「村八分」だ。

「村八分」という言葉は江戸時代にできたようだが，その実態は稲作村落共同体が生まれて以来ずっと存在していたものと思う。そもそも人類は単体としては決して強靭な生物とはいえない。身を守る毛皮もなければ，敵を食いちぎる牙も持っていない。それが力を合わせ協力しあうことによって地球上最強の生物となったのだ。つまり人間の最大の特徴は協力・共同ということにある。もちろんそのためには知能や言語の発達などの基本的要素も必要だが，それを共同社会形成に役立てたところに意義があるのだ。

個人的には弱者である人間が，その最大の強みである共同体社会の一員としての資格を剝奪されてしまったらどうだろう。共同体構成員の権利を奪われるだけではない。昨日までの味方が敵になるかもしれない。犯罪者の家族は今でも肩身の狭い思いをする。戦時中なら非国民として非難された。なかには自殺してしまう家族もいる。「村八分」はそんな恐ろしい制度なのだ。しかしそれはルール違反者を罰するのが本来の目的ではなく，共同体自体を守ることに主眼があった。日本人は稲作共同体誕生以来，「村八分」的制度を採用することによって，弱者の集団である共同体を守り，維持してきたのだ。

歴史的に連綿と続いてきた共同体のルール，これが日本人の行動を規制する最大の縛りである。そのルールには近代的な人権尊重の意識はない。共同体にとって最も大切なのは共同体の維持である。共同体が分裂あるいは崩壊すれば，残るのは家族のような弱者の小集団か個人という弱者のみだ。彼らは弱肉強食の世界で生き残っていくことは難しいだろう。個人が生き残ろうとすれば，家族が生き残ろうとすれば，彼らは共同体のルールに従うしかないのだ。こうして「公」は「私」に優先されることになる。

すでに述べたように本質的には日本人も「私」を重視する民族だ。何よりも大切なのは自分であり，いとしい家族なのだ。しかし自分中心・家族中心主義

を貫けば共同体のルールに逆らうことにもなりかねない。町内会の割り当て仕事，ゴミ収集場所の清掃や会費の徴収など，怠った者は町内で話し相手もいなくなるかもしれない。少なくとも陰で悪口を言われることになるだろう。だから「公」を大事にしなければならないのだ。そしてそれが少なくとも戦前までの日本人の習性であった。

歌舞伎などの伝統的世界では，その習性が当然のように引き継がれている。伝統芸能の世界では「公」が優先されるのは当り前のことなのだ。そしてそれが「私」の犠牲の上に成り立っていることは誰もが承知している。「私」の大切さは誰もが認識している。だからこそ「私」を犠牲にして「公」を優先する人物を称賛することになる。称賛されればその期待に応えなければならないという新たな縛りも生まれる。民主主義・個人主義と言われる現代においても，伝統芸能の世界では，それが「伝統」であるがゆえに，常に「公」が優先されてきたし，これからも優先されていくことだろう。

日本は明治以来，国家の存亡を懸けた戦争を何度か繰り返してきた。そのとき軍人たちは死を恐れながらも，その恐怖心を素振りにも見せずに立ち向かっていった。敵に背を向ければ軍法会議が待っていた。敵前逃亡は非国民のやることであった。非国民の家族もまた「村八分」となって非難された。愛する家族を守るためには，自分を犠牲にして上からの命令に従うしか道はなかった。天皇陛下のためではない。まして軍隊のためではない。愛する家族のために死んでいったのだ。

終戦後，進駐軍は旧日本軍のテロ攻撃を恐れていた。降伏したとはいえ，カミカゼを生んだ国民である。捕虜となるよりも玉砕を選ぶ国民である。日本本土に進駐したとき，死をも恐れぬ旧日本兵がどんな行動を採るかは予測がつかなかったであろう。アメリカがイラク戦争に勝利しながら，いまだにイラクの治安が安定しないのは頻繁にテロがあるからだ。日本進駐のとき，今のイラクのような状況を予想したとしても無理はないだろう。しかしテロはなかった。占領は平穏のうちに進んだ。そもそも一般の兵士は家族のために戦っていたのだ。何かの主義主張や宗教的信念のために戦っていたわけではないからだ。

欧米の一神教を模倣して作られた，人工宗教である国家神道はすでに破綻し

ていた。皮肉なことに国家神道の創作者たちはそれを宗教とは呼ばなかった。仏教やキリスト教などと同列に並べられることを嫌ったのであろう。結果として国家神道は日本人にとっての宗教とは成りえなかった。日本人にはそもそも行動原理としての宗教らしい宗教はなかった。例外は一向宗と日蓮宗，それにキリシタンかもしれない。多くの日本人にあるのは先祖崇拝と共同体維持のための「和」の精神であった。彼らを内面からテロに駆り立てるような宗教は存在しなかったのだ。しかも彼らはまず自分たちの家族を食べさせるところから始めなければならなかった。それも東京をはじめ，焼け野原となった貧しい国土の上で。日本にテロがなかったのは当然のことだろう。

日本人は基本的に平和的な民族なのである。農耕社会は戦争には向いていない。戦争や争い事があれば，手入れの行き届かない田畑は荒れてしまう。戦いそのものによっても荒らされてしまう。『古事記』には戦争は描かれているが，騎馬戦はない。古代日本には牛車はあっても馬車はない。牛中心の農耕社会は戦争に向かない。彼らに必要なのは一致協力して農作業に従事する「和」の精神であった。

その「和」の精神を最初に文章化したのが聖徳太子の「十七条の憲法」であった。第一条の「和をもって貴しとなす」という言葉は有名である。聖徳太子の時代はまだ王侯貴族が武器を持って戦う時代だった。それでも第一条で「和」の精神を説き，最終第十七条では話し合いの重要性を説いた。力ずくで物事を解決することは好まなかったということだ。日本人は古代から平和的な民族であった。

「平和的な民族」とは言ってもそれは相対的な表現だ。日本人も『古事記』に描かれた時代から戦争を繰り返してきた。しかし平安時代には王侯貴族が死を忌み嫌い，戦争を武士にマル投げしたという事実がある。江戸時代には「乱」と呼ばれる小戦闘はいくつもあったが，それでも大きな戦争はなく「太平の世」と呼ばれた。第二次大戦後にはアメリカから押し付けられた「平和憲法」を後生大事に押し頂いては戦争から遠ざかってきた。他国からの「軍隊は持ってはだめだ」「戦争をしてはだめだ」などという押しつけ憲法で日本人がずっと満足してきたのは，戦後教育の成果もあるだろうが，やはり日本人の平

和志向的性格を示すものだろう。

もちろん例外はあるが，それはあくまでも例外だ。古代の百済・任那・大和政権の関係はあまりに昔のことなのでよく分からないのだが，白村江の戦いに侵略戦争的意味があったとは思えない。その後の歴史で侵略的発想を持っていた日本人は，私の知る限り織田信長と豊臣秀吉の二人しかいない。信長は天下統一の前に倒れてしまったので，実際に海外派兵を行なったのは秀吉だけだが，この二人に坂本竜馬を加えた三人が，歴史上の人物で日本人に人気のあるベスト・スリーだというアンケートがあった。

実は織田信長と坂本竜馬の人気は，司馬遼太郎という歴史小説作家の影響が大きく，そのことを勘案すれば，日本人に一番人気のあるのは，恐らく韓国では大いに悪評が高いであろう豊臣秀吉ということになる。ただし朝鮮半島への派兵は日本人の間でも評判は悪く，秀吉が天下を統一するまで，つまり日本版アメリカン・ドリームともいうべき，秀吉の出世物語の部分の人気が大きいということも知っておいてもらいたい。

秀吉は，信長の部下になるまで何をしていたかいろいろな説があるようだが，とにかく足軽として採りたてられてから次々と殊勲をあげて信長の五大武将の一人にまで出世する。信長の死後はライバルたちを蹴散らして日本を統一するのだが，その出世街道を邁進する過程において，武力そのものよりも策略を重視した点も人気の理由の一つだ。

日本には西洋のチェスに似た将棋というゲームがある。将棋はインド起源らしいが中国を経由して日本に輸入され独特なルールを発展させた。何が独特かというと，取り上げた相手の駒を味方の駒として使うことができるという点だ。チェスではゲームの進行とともに盤面の駒数が減って寂しくなるが，日本将棋では相手の駒を利用できるので必ずしも盤面が寂しくなるということはない。

ゲームではなく実際の戦争においても，単に武力のみで相手を殲滅するよりも，策略で相手の部下を裏切らせたり，捕虜にした相手を説得して部下にすることが良策と考えられていた。つまり敵を殺すこと自体は勝利への過程の一部であって，敵を味方にすることによって勝利し，自軍の勢力を拡大することの

できる者が優れた武将ということになる。日本将棋はこの日本式戦争の理想をゲーム化したものだし，その理想を体現した最高の人物が豊臣秀吉ということになる。

秀吉は晩年には狂気に捕らわれていたという説もある。後継者にしようとしていた甥の秀次を殺したり，朝鮮出兵も狂気のなせるわざの一つと数えられている。しかし天下統一までの秀吉は，出来るだけ無駄な戦闘を避けることによって人命を尊重したとも考えられるのだ。ちょうど将棋というゲームのように。

明治以降の日本は，「富国強兵」の名のもとに軍事力を強化し，第二次大戦に敗北するまで幾多の戦争を経験しているため，平和主義国家というイメージはないかもしれないが，その多くが防衛戦争の意味合いが濃かったことは留学生諸君にも知ってほしい。特にロシア帝国主義の脅威に対する日露戦争がそうだ。

そもそも日本が維新の内戦を戦ってまで，国の体制を新たにしたのは，十九世紀の西洋帝国主義の圧力によるところが大きい。徳川幕藩体制を維持していては欧米によって植民地化されてしまうという恐怖心が日本を変えたのだ。したがって明治の「富国強兵」は，危機意識・防衛意識の所産なのだ。

第二次大戦時の中国大陸における戦争については，現在の日中・日韓の政治問題にも関わることなのであえて言及を避けるが，対米英戦争について言えばこれも防衛戦争であった。二十世紀は石油の時代だが，日本には石油がない。その石油を禁輸されたらどうなるか。弱肉強食の帝国主義時代に日本は生き残っていくことはできなかったであろう。当時のバカな軍人官僚たちもさすがにそのことだけは分かっていた。だからこそ真珠湾攻撃という一発逆転の賭けに出たのだ。

つまり日本の対外戦争は，そのすべてとは言わないが防衛色の強いものであり，そのことは，対日戦の最高司令官であったダグラス・マッカーサーによる昭和二十六年五月三日の米上院軍事外交合同委員会での「彼ら（日本人）が戦争に飛び込んでいった主な動機は安全保障であった」という証言が明らかにしている。

何を言いたいかといえば，日本人は基本的には平和的民族だということだ。もちろん比叡山の僧兵たちを殲滅させた織田信長や，日露戦争後の好戦的な軍人官僚もいた。しかし彼らは例外であり，例外はどの社会，どの民族にもいる。例外をもって日本人を推し量ることは止めてほしい。

繰り返すが日本人は基本的に平和的な民族である。それは農耕社会の村落共同体の伝統が浸み込んで生まれたものだろう。その平和を乱すのは突出した例外的人物である。突出した人物の力が強ければ信長のような独裁者になった。力が弱ければ，周りの人間から単に危険視され，ときには「村八分」にされた。独裁者となった信長は部下に裏切られて殺された。良い意味でも，悪い意味でも突出した人物は共同体の「和」を乱す危険性があった。一般的な日本人は消極的に生きていればそれで良かったのだ。「和」を乱さなければ良いのだ。

日本は，誰が総理大臣になっても日本は変わらないと言われたことがある。「アイドル１年，総理２年の使い捨て」という言葉が流行ったこともある。最近では一年ごとに総理が交替する時期もあった。民主党政権は確かにひどかったし，その上東日本大震災の追撃まで受けたが，それでも日本がつぶれることはなかった。最近の総理では小泉さんなどは例外中の例外だろう。トップが誰でも，国民みんなが協力し合っていけば大抵の苦難は乗り越えられてきたのだ。

江戸時代の支配者である徳川将軍家には，愚昧な将軍も少なからずいたようだが，それでも二世紀半にわたる平和を維持してきた。幕府の官僚組織に守られてきたのだ。その平和を壊したのは，十九世紀半ばの西洋帝国主義の進出であった。西洋諸国に対抗するために日本は変わらざるを得なかった。武士としては下層階級出身の，大久保利通や伊藤博文のようなリーダーの出現を必要とする時代もあった。

幕末・維新の時代は多くの英雄を生んだ。南北朝時代の朝廷の権威の失墜，室町時代の足利幕府の権威の失墜に続いて，戦国時代が到来して多くの英雄が生まれたように，混乱期には強いリーダーシップが必要とされた。しかし元々戦争に向かない日本人に英雄の時代は長く続くことはなかった。融通の利かない官僚の時代に戻ってしまった。山本五十六元帥ですら消極的な発想から抜け

きらない官僚であった。唯一積極的な作戦といえるのは真珠湾攻撃だけだった。その後は山本五十六もその後継者も，戦力を小出しにする消極的な作戦ばかりで，ジリ貧の状態で国を敗戦に導いた。前線の兵士がいくら頑張っても，作戦を立てるトップがダメでは戦争には勝てないのだ。

日本人は戦争に向いていなかった。維新・明治の英雄が去って以来，国力以上に実力を発揮して大戦争を勝ち抜く英雄はいなかった。従来の発想から抜けきらず，大きな戦略もなく，消極的な戦術ばかりに頼った官僚国家日本は，負けるべくして負けた。試験秀才である官僚の発想は消極的であり，型にはまってしまう。大局的見地から国家全体のことを考えるよりも無難に現状を切り抜けようとする発想で，大国アメリカとの戦争に勝てるわけがない。

それでもアメリカは日本を恐れた。カミカゼと玉砕の国として恐れた。日露戦争で初めて白人の国を破った国として恐れた。その結果生まれたのが，日本を二度とアメリカとは対抗できないような国にしようとする，マッカーサー元帥の日本占領政策であった。現代の日本人は，古代からの DNA と，アメリカの占領政策と，コミンテルンの息のかかった日教組教育の三つの要素から生み出されていると言ってよいだろう。

中村勘三郎の話から，いつのまにかアメリカの占領政策や日教組教育といった堅苦しい話が出てきてしまった。いつもの授業の雑談の調子で取りとめもなくあっちこっちと書き綴ってきた結果だが，ここまで来ると私も参考書の助けなしには息が切れてきたし，私より若い世代の中には，日教組教育や GHQ の民主化政策の影響をもろに受けた日本人も多いと思われるので，私の常識が平均的な日本人の常識とは言えない面も増えてくる可能性が高い。そこでこの辺で話題を変えて，そろそろまとめの話に持って行こうと思う。

ただ私より上の世代では，GHQ や日教組教育のおかげで，自由や平等を旗印に，義務よりも権利を主張する自己中心的な現代日本人が数多く生まれてしまったという点については，ほぼ認識は共通していると思う。アメリカが占領政策として何をしたか，日教組が何をしたかは，まともな現代史の本を読んでもらえば分かることなので，この点の勉強は留学生諸君各自の意志にお任せしたい。

さて日本人はシャイで，人付き合いが下手だと言われる。そのため留学生諸君は日本人の友人を作るのにかなり苦労しているかもしれない。日本人がシャイな理由はもうお分かりだろう。日本人は家族を大事にする。疑似家族としての共同体を大切にする。共同体には明文化されない独自のルールがある。例えばある地方では，座敷に上がって座布団を薦められても三回遠慮した後でなければ座ってはいけないそうだ。そうでなければ世間知らずの厚かましい奴と思われてしまう。どこにどんなルールがあるかは分かったものではない。日本人が人間関係に消極的になって，シャイになってしまうのも当然のことだろう。

「無礼講」という言葉がある。酒の席などで，上司や部下の上下関係を忘れて，対等の関係で楽しもうというときに使われる。しかし実際にすべての無礼が許されるというわけではない。従業員が十人もいないような小さな会社の飲み会なら，部下が「おい，社長！」と呼び捨てにしても許されるかもしれないが，普段一度も会ったことのない大会社の社長を新人社員が同じような態度で接したらどうだろうか。よほど度量の大きな社長なら別だが，やはり節度というものはあるだろう。外国人にはこの節度を推し量るのが難しいと思われる。

実を言うとこれは日本人にも難しい。無礼講といっても百パーセントの無礼講はないと思ったほうが良い。したがってこの程度までは大丈夫かな，と探りながら接していくことになる。日本人は外国人になかなか心を開かないと言われるが，実は日本人同士でも，相手の本心がどの辺にあるのかを探りながら，無礼講でいえば，どこまでの無礼が許されるのかを探りながら付き合っているというのが実情だ。共同体のルールといっても様々な共同体がある。生まれ育った共同体ならともかく，引っ越したり，進学したり，就職したりしたときには，新しい共同体の一員になる。日本人同士であってもそれぞれの共同体には少しずつ違ったルールがあるのだ。

外国人には，日本人は心を開かない奇妙な民族に映るだろう。しかし簡単には心を開かないという点では日本人同士でも同じだということを知ってほしい。そうすれば最初から百パーセントの友人を求めて，自国の判断基準からは予想もつかない態度を取られて，「裏切られた」などと思うこともないはずだ。日本人は裏切ったり，裏切られたりしないように慎重に人と接する。だから消

極的であり，シャイなのだ。

また日本人はよく謝るし，すぐ謝る。これも日本人の特徴の一つだ。だから外国へ行くとき，「トラブルに巻き込まれたときには，絶対『アイアムソーリー』と言ってはだめだ」などというアドバイスが必要になる。謝罪は自分の非を認めたことになるからだ。ところが日本では早めに謝ったほうが得になる。罪を認めて潔く謝るのは日本では美徳と考えられている。そして謝った人間を許すのも，美徳と見なされる。謝られたら「水に流す」のが美徳なのだ。

日本人は消極的で自己主張をしない。事を荒立てることを好まないからだ。ときには嘘をついてでも「和」を守ろうとする。しかし日本人だって自己主張したくないわけではない。自己主張して，自分を正当化して，立身出世したいと思っている。しかし日本には「私」よりも「公」を尊重する伝統がある。だから「我慢」しているのだ。この「我慢」は良いほうに出れば，例えば東日本大震災のとき，被災者たちが我慢し合って，秩序だった行動を取れたことにつながる。逆に日本人の消極性，謝罪を美徳とする考え方が，悪い結果を生む場合も当然ながら存在する。

元官房長官の河野洋平は，従軍慰安婦問題で，当時官房副長官の石原信雄がいくら探しても，慰安婦問題に軍が関与した証拠が見つけられなかったというにもかかわらず謝罪した。謝罪は美徳だからだ。もし河野氏が，外交特権のない一般人としてアメリカで交通事故を起こしたら，きっとすぐに謝罪をして，これで事なきに済むと思ったとたんに告訴されて，確実に有罪となることだろう。つまり国内の美徳も，海外または外交の世界では通用しないのだ。恐らく河野談話の真実は，外国人にはまず理解してもらえないだろう。

「日本の常識は世界の非常識」という有名な言葉がある。日本人には当り前のことであっても，世界では通用しない考え方がたくさんあるということだ。だからこそ徹底的に議論をすることが必要なのだが，「和」を尊ぶ日本人は，議論は争いに通じると消極的に考えてすぐ妥協してしまう。一般人ならそれでも良いかもしれないが，外交に携わる政治家が世界の常識を知らなくては困る。ところが河野氏のような無知な政治家が，自民党総裁や衆議院議長にまで上り詰めることのできるのが日本の政治の実態なのだ。

政治家の謝罪は，選挙公約と同じで，ほとんどが口先だけと考えて間違いないと思うが，日本人だってもちろん真剣に謝ることはある。ただしトラブルを避けるために自分の主張を押し殺して謝るということもある。トラブルを避けるのが目的だから本気で謝っているわけではない。本音と建前が違うのだ。政治家ばかりでなく，一般の日本人の謝罪にも形式だけのまごころのこもっていない謝罪も少なくないということだ。

外国人からすれば日本人は誠意がないということになる。しかし日本人の側からすれば目的はトラブルを避けることであり，特に相手が感情的になっている場合は，議論をしても無駄だし面倒だと考えている。謝って済むものならその方が楽だと考える。日本人にとって一番大切なのは「和」だ。「和」を保つためなら「嘘も方便」で仕方がないと考える。決して悪意からではない。むしろ本心でなくても，謝罪することによって「和」が保たれればそれが美徳だと信じている。ところが外国人にはこの考え方はなかなか理解されない。文化の違いだ。

そこで「異文化理解」という言葉が出てくる。「異文化理解が大切だ」とお題目のように唱えても，実際にはそれほど簡単にはいかないのがこの異文化理解なのだが，外国人にとっても日本人にとっても，留学が異文化理解のための最大のチャンスであることは間違いない。最近は日本人の外国への留学生が減少傾向にあるという。もともと消極的な性格の日本人だ。バブル崩壊後，またリーマン・ショック後の委縮した日本から留学生が減るのも当然のことだろう。

むしろ日本への留学生に期待したい。日本への留学をアメリカ留学へのステップと考えている留学生も多いようだが，日本へ来る以上，日本への関心がないはずはない。せっかく貴重な時間とお金をかけて留学してきたのだから，全員が将来，いつでも日本との外交に携われるくらいの意欲を持って，日本理解に向けて努力してほしい。

日本にいる外国人は，基本的には日本へのお客様ということになる。お客様に対しては丁寧に礼儀正しく接するものだ。外国人が日本に来て，「日本人は親切だ」という印象を持つことがよくある。それはお客様だから親切にするの

だ。しかし長期間滞在する留学生の場合，アウトサイダーとして敬遠されることも多いかもしれない。異文化理解が難しい以上，難しい付き合いはご免だ，と考える日本人も多いことだろう。楽しい思いもすれば，辛い思いもするかもしれない。

しかしお客様扱いされるにしろ，アウトサイダー扱いされるにしろ，どちらの立場であっても日本人の一面に接していることは間違いがない。それも一つの勉強なのだ。ただしそれはあくまで日本人の一面であって，異文化理解にはもっと広く深く様々な経験が必要だということは忘れないでほしい。自分の狭い範囲の経験から，日本人や日本文化を型にはめることなく，積極的に多くの経験を求めて，そして自分の頭で考えてほしい。留学するということは，積極的に異文化に接することであり，新しい発見をする機会なのだ。自分の知識を単に確認するだけなら，それは日本そして日本人の一面しか見ていないことになる。それでは中国のことわざにある「井の中の蛙大海を知らず」になってしまう。

留学というのは，「井の中」つまり自分の国のことだけしか知らず，狭い視点に捕らわれてしまう危険性から，「大海」つまり世界に出て行って，世の中にはいろいろな文化や考え方があり，嵐の吹き荒れるような現代の大海，つまり混迷する世界情勢の中で，自分なり，母国なりがどのようにその困難を乗り切っていくべきかを学ぶ機会なのだ。

私は今，福沢諭吉も乗っていた幕末の咸臨丸の姿をイメージしている。当時，アメリカへの航海は多くの困難が伴ったことだろう。しかし彼らは帝国主義の脅威にさらされたアジアの一国民として，強い危機意識のもとに困難な航海へと乗り出したのだ。現代の留学は，咸臨丸の航海に比べればはるかに楽なはずだ。これは日本人学生にも言えることだが，海外へ渡る学生は，決して困難を恐れず，自分のため，母国のために，異文化理解を通して世界とは何かを学んでほしい。そしていざというとき，いろいろな面で役立つ人材に育ってほしいと願っている。